

秋田大学土木工学科
秋田大学土木工学科
秋田大学土木工学科

正員 榎 豊 知 徳
正員 澤 木 征 三
学員 ○ 佐 江 崇

1.はじめに 本論文では、薄肉直線材の曲げおよびねじりに伴うせん断変形を考慮した剛性マトリックスを示した。その際、ひずみ成分を陽分形で表示し、仮想仕事の原理を用いて剛性マトリックスを求めず手法を用いた。せん断変形の影響は、ひずみ成分に對し補正する形で考慮され、応力のつりあいと満足すべく繰り返し修正される。本文では、ひずみと断面上の位置の原点の変位を表示し、その過程において、部材軸方向変位 w の決定に主眼が置かれる。解析の際用いた基本的仮定は、[I] 断面不変と保持する [II] 薄肉要素の板厚中心面に垂直に部材軸線に平行な断面でのせん断ひずみは無視する [III] 開断面において部材軸方向応力は、肉厚中心線上の軸向応力が平均値として一定に分布するものとする。などである。[I] は一般に橋梁に用いられる部材が長さ L に比べ断面寸法の非常に小さいものであることより妥当であり、[II] は薄肉材を取り扱う際通常用いられる仮定である。また [III] は部材の微小要素の応力のつりあい式に適用される。

2.変位とひずみの関係 解析には、 $(D-x, y, Z)$ と $(C-S, n, Z)$ の2つの直交座標系を用いる。ここで、 D, C はそれぞれ横断面上、薄肉断面上の任意の原点とし、 Z は部材軸方向、 S は薄肉中心線沿い、 n は S と直角な肉厚方向座標である。変位は、横断面原点 D 上 (u, v, w) 、薄肉断面上の任意点 $P(x, y, z)$ で $(\bar{u}, \bar{v}, \bar{w})$ とする。任意点のひずみと変位の関係は次式を用いた。
$$E_x = \frac{\partial u}{\partial x}, E_y = \frac{\partial v}{\partial y}, E_z = \frac{\partial w}{\partial z} \dots (1) a-c \quad \gamma_{xy} = \frac{\partial u}{\partial y} + \frac{\partial v}{\partial x}, \gamma_{yz} = \frac{\partial v}{\partial z} + \frac{\partial w}{\partial y}, \gamma_{zx} = \frac{\partial w}{\partial x} + \frac{\partial u}{\partial z} \dots (2) a-c \quad \text{仮定 [I] より}$$
 ひずみ成分について、 $E_x=0, E_y=0, \gamma_{xy}=0$ が成り立ち、(1)(2) 式より $\bar{u}=u-y\varphi, \bar{v}=v+x\varphi \dots (3)$ となる。(3) 式において φ は D 点での回転変位である。さて (S, n, Z) 座標に與するせん断ひずみを γ_{sz}, γ_{nz} とすると、 γ_{yz}, γ_{zx} は次のように変換できる。

$\gamma_{sz} = m\gamma_{yz} + l\gamma_{zx}, \gamma_{nz} = -l\gamma_{yz} + m\gamma_{zx} \dots (4) a, b$ (4) 式で l, m はそれぞれ方向余弦であり (2) 式を代入して $\gamma_{sz} = \frac{\partial \bar{w}}{\partial S} + v' \frac{\partial y}{\partial S} + u' \frac{\partial x}{\partial S} + \gamma_{yz} \varphi' \dots (5)$ $\gamma_{nz} = \frac{\partial \bar{w}}{\partial n} + v' \frac{\partial y}{\partial n} + u' \frac{\partial x}{\partial n} + \gamma_{zx} \varphi' \dots (6)$ となる。(5)(6) 式において $(\cdot)'$ は $\frac{\partial}{\partial S}$ と表わし、 $\bar{y}, \bar{m}$ は任意点 P の S 方向、 n 方向への D 点よりの垂線の長さである。仮定 [II] は $\gamma_{nz}=0$ と表わしそれ (6) 式に適用し n について積分すると $\bar{w} = C(S) - v'y - u'x - \bar{m}\varphi' \dots (7), C(S)$ は積分定数である。ここで微小要素 $dx ds dz$ の応力のつりあいと考えるとき外力を無視して $\frac{\partial}{\partial S}(T_{sz}^* dx) + \frac{\partial}{\partial z} \left\{ \int_{-s_0}^{s_0} \gamma_{sz}^* dx \right\} = 0$ となる。これを S について積分し、仮定 [III] を用いると $\gamma_{sz}^* = \frac{\partial}{\partial S} \left\{ \frac{1}{Gk} \int_{-s_0}^{s_0} (\gamma_{sz}^* dx) \right\} \dots (8)$ となる。 $*$ は肉厚中心線に関するものを表わし、 G は積分定数である。(8) 式においてまず $\gamma_{sz}^*=0$ と仮定し $\gamma_{sz}^* = \frac{\partial}{\partial S} \left\{ \frac{1}{Gk} \int_{-s_0}^{s_0} (\gamma_{sz}^* dx) \right\} \dots (9)$ とおく。こうして求めた $\bar{w}$ より γ_{sz}^* を決め、再び (8) 式にもどって修正する。(5) 式より求められる γ_{sz}^* と (9) 式より $\frac{\partial \bar{w}}{\partial S} = \frac{\partial}{\partial S} \left\{ \frac{1}{Gk} \int_{-s_0}^{s_0} (\gamma_{sz}^* dx) \right\} - v' \frac{\partial y}{\partial S} - u' \frac{\partial x}{\partial S} - \bar{m}\varphi' \dots (10)$ となる。(10) 式において γ_{sz}^* は変位の連続条件より求まる。すなわち $\oint \frac{\partial \bar{w}}{\partial S} dS = 0$ に代入すると $\gamma_{sz} = G \left(\oint \bar{v}^* dS / \oint \frac{dx}{k} \right) \cdot \varphi' \dots (11)$ 。また (7) 式より $m=0$ とおいて求められる $\bar{w}^*$ と (10) 式に代入すると $\frac{\partial \bar{w}}{\partial S} = \frac{\partial}{\partial S} \left\{ \frac{1}{Gk} \int_{-s_0}^{s_0} (\gamma_{sz}^* dx) \right\} - \bar{v}^* \varphi' \dots (12)$ となる。(12) 式で S で積分したものを (11) 式に代入し、さらにそれを (7) 式の $C(S)$ と置き換えると変位 $\bar{w}$ は次式になる。 $\bar{w} = C_0 - v'y - u'x - (\omega^* + \bar{m}\varphi') \varphi' \dots (13)$ 。(13) 式において $\omega^* = \int_{-s_0}^{s_0} \bar{v}^* \left(\oint \frac{dx}{k} \right) \frac{1}{k} dx \dots (14)$ であり、また積分定数 C_0 を求めるため $C-D$ 間を $x=0$ の仮想薄板で結ぶ。これにより (13) 式は D 点に於いて成り立ちそれと w とし $C_0 = w + \int_{-s_0}^{s_0} \bar{v}^* dx \varphi'$ と表わす。

従って (13) 式より $\bar{w} = w - v'y - u'x - \omega \varphi' \dots (15)$ となり、ここで $\omega = \omega^* + \bar{m}\varphi' - \int_{-s_0}^{s_0} \bar{v}^* dx \dots (16)$ である。(16) 式の積分項は $C-D$ に沿った積分を表わし、それはより正確に、すなわち $\oint \omega dF = 0$ と満たすような ω を選ぶことにより求まる。それと (16) 式に代入し、最終的に $\omega = \omega^* + \bar{m}\varphi' - \frac{1}{F} \left\{ (\omega^* + \bar{m}\varphi') dF \right\} \dots (17)$ とおくと変位 $\bar{w}$ は (15) 式で表わされる。さてここで (8) 式にもどって直応力 σ_z^* を考慮したときのひずみ成分の修正を行う。(15) 式より $\sigma_z^* = E E_z^* = E \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} = E (w' - y'v' - x'u' - \omega \varphi')$ となる。これを (8) 式に代入し、同様な手順と繰り返すと $\bar{w} = w - v'y - u'x - \omega \varphi' - \frac{E}{G} (B_F w'' - B_Z v'' - B_Y u'' - B_\omega \varphi'') \dots (18)$ となる。従ってひずみ成分 $E_x, \gamma_{yz}, \gamma_{zx}$ は次式になり、他のひずみ成分はゼロである。

$E_x = w' - y'v' - x'u' - \omega \varphi' - \frac{E}{G} (B_F w'' - B_Z v'' - B_Y u'' - B_\omega \varphi'') \dots (19)$ $\gamma_{yz} = \theta \varphi' - \frac{E}{G} (S_F w'' - S_Z v'' - S_Y u'' - S_\omega \varphi'') \dots (20)$ (20) 式で θ は開断面では $-2n$ 、閉断面では $\left(\oint \frac{dx}{k} \right) \frac{1}{k} - 2n$ となり、(18)(19)(20) で $B_F \sim B_\omega, S_F \sim S_\omega$ は次のように定義した。

$B_F = \int_{-s_0}^{s_0} \frac{S_F}{k} dS, B_Z = \int_{-s_0}^{s_0} \frac{S_Z}{k} dS, B_Y = \int_{-s_0}^{s_0} \frac{S_Y}{k} dS, B_\omega = \int_{-s_0}^{s_0} \frac{S_\omega}{k} dS, S_F = S_{F0} - S_{F1}, S_Z = S_{Z0} - S_{Z1}, S_Y = S_{Y0} - S_{Y1}, S_\omega = S_{\omega 0} - S_{\omega 1}, S_{F1} = \oint \frac{S_F}{k} dx \frac{dx}{k}, S_{Z1} = \oint \frac{S_Z}{k} dx \frac{dx}{k}, S_{Y1} = \oint \frac{S_Y}{k} dx \frac{dx}{k}, S_{\omega 1} = \oint \frac{S_\omega}{k} dx \frac{dx}{k}, S_{F0} = \int_{-s_0}^{s_0} S_F dx, S_{Z0} = \int_{-s_0}^{s_0} S_Z dx, S_{Y0} = \int_{-s_0}^{s_0} S_Y dx, S_{\omega 0} = \int_{-s_0}^{s_0} S_\omega dx \dots (21)$

